

森の通信

ウータン

SAVE THE TROPICAL FORESTS

39

Hutan

1996年5月30日発行



「森の用の心を極くカヤン人」

ウータン・森と生活を考える会

【一部】300円

〒530 大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308号「関西市民連合」事務所気付
phone 06-372-1561

【年会費】3000円

【郵便振替】00930-4-3880

everybody on The 熱帯林!

ウータン活動報告

森の通信 CONTENTS



もくじ



今号の発行、えらく遅くなりました、ごめんなさい。その間、学習会や交渉など「ウータン」としての活動はしていたのですが、「通信」に手が出なかったのは、ボランティアスタッフ「のみ」のマイナス面がモロに出た形です。（ああ、人手さえあれば！よろよろ）
 そももって、今回でこのコーナーはおしまいです。スタッフの近況報告コラムでしたが、一巡したということです。（スタッフが増えれば続いたのだけれども、うるうる）
 次号からはレイアウト等リニューアルの「ウータン・森の通信」で登場、遅らせないよう頑張ります。
 そして、この「ウータン」を充実させるための、二つのお願いです。
 ☆同封のアンケートはがきの返送。
 ☆投稿原稿や意見などのレター。
 （但し全てが載ったり、反映されるとは限りません。抜粋・没アリです）
 ナイスなアイデア、原稿、（お金も）首を長くして待っています！（山猫屋）

95.11.15	ウータン、パプア・ニューギニアの2名を迎え、「最後の熱帯林」報告会持つ。「アジア太平洋地域熱帯林研究会」開く。
11.27	APEC・NGO環境部会、今後関西の環境NGOのネットワーク・調査等行おうと決める。
12.6	ウータン拡大事務局会。
12.10	関西熱帯木材使用削減委員会(以下「削減委」と略)自治体キャンペーン部会
12.15	熱帯林連続講座Part.2 ②家具編/ゲスト永田健一氏他
12.17	「削減委」住宅部会
12.17	「削減委」家具部会
12.19	APEC・NGO環境部会へ4月集会
96.1.18	ウータン総会 特別報告「サラワク最新報告・神前大阪外大助教
1.21	「削減委」自治体キャンペーン部会、関西全自治体へアンケート発送決める。
1.29	「削減委」家具部会
2.3	「削減委」全体会議
2.5	熱帯林連続講座③ごみ、廃材、リサイクル編/ゲスト山本達士、中院彰子氏
2.17	APEC・NGO環境部会へ「地球環境NGOネットワーク関西」設立へ会議。
2.19	「削減委」自治体キャンペーン部会、
3.4	「削減委」全体会議、家具部会、住宅部会。
3.9	「削減委」全体会議、家具部会、住宅部会。

ウータン活動報告	西岡良夫	2
総会報告	西岡良夫	3
ウータン '96年度の方針	荒木琢磨	4
海外ゲスト来阪報告	森を守る人たち	4
パプアニューギニアの	辻村方孝	6
海外レポート		
「最後の熱帯林」		
パプアニューギニアをたずねて		
熱帯林連続講座Part.Ⅲ・報告	西岡良夫	8
「住宅編」	井下祥子	9
「家具編」	井下祥子	9
家具アンケート結果報告(其ノ志)	まとめ・井下祥子	10
新聞切り抜き帳		12
「ウータン・ニュース」		12
連載・熱帯林を考える	猪俣栄一	13
12「開発輸入の構造と問題点」		13
♪会費とおたより		17
♪投稿のPage		18
♪森の写真館4.	Photo 荒川共生	19

ウータン96年度の資金



総会より

事務局長・西岡良夫

ウータンや熱帯林きょうと等の呼びかけで「関西熱帯木材使用削減委員会」が、昨年十月に発足した。「削減委員会」と調整してどうあるべきかなど、一月二一日の総会で話し合いがされた。

- ①自治体キャンペーン等
- 二〇四七年にアジアの森がなくなる
- と言われ、日本合板連合会は熱帯材使用量を96年に21%、二千年に50%削減と予測しているが、自治体、企業へ働きかけが必要だ。予定として、

- (1)「削減委」で関西全自治体アンケート、全国都道府県等にアンケート。
- (ii)ウータンは大阪府、大阪、堺、豊中市と四月に話し合う。

②家具キャンペーン

(iii)八月頃、茨木、寝屋川市等と交渉。熱帯材合板の約25%を占めている現状で、枯渇問題、製造工程、長持ちリフォームさせるPRが必要だ。

- (i)消費者向け家具アンケートの集計。一集計など「削減委」に引きつぐ。
- (ii)家具パンフ「家の中の熱帯林」増冊。
- (iii)「削減委」で、家具製造、流通など企業調査等を行い、分析する。
- ③住宅材調査
- 「削減委」で行うが、針葉樹情報調査。
- ④全国との交流を推進。
- ⑤スタッフの拡大策
- ⑥講座等へ会員参加を拡げる。
- ⑦熱帯林連続講座一引き続き行う。
- ⑧「枝打族」

- P.H.D協会主催ウータン協力で毎年行っているが、P.H.D協会、地元丹波大山の負担大で、「枝打族」スタッフを作れるようウータンも協力する。
- (i)丹波大山で六月頃、下草刈り
- (ii)八月頃、「枝打族」本番など
- ⑨環境開発教育のワークショップ
- パンフ作りのために公募協力をして

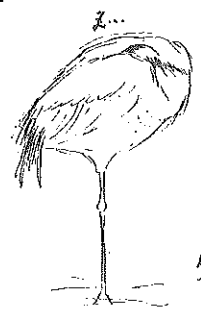
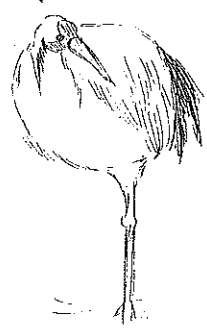
⑩製作・広報

- (i)Tシャツ等の製作。
- (ii)出前講座、連続講座(なるだけアキシオンに繋がるもの)のPR。などを事務局が提案し、予算については、「もつと削減する方向にすべき」等の意見が出された。

昨年から「削減委」「アジア太平洋地域熱帯林研究会」が始まり、環境開発教育プログラムもはじめますので、事務局等へ是非ぜひご参加願います。

当面のスケジュール
5月26日 ハイキング／春日山原生林

Let's Action
ふい 相坊 起りよ



タチウ

海外ゲスト
来阪

パプアニューギニアの森を守る人達

報告・荒木 琢磨

穏やかで大きな人フランクリンさん

フランクリン・セリさんはパプアニューギニア（以下PNG）北岸のコリンウッド湾に面する村ウイアクの人で、地域ぐるみで伐採会社の進める「開発」を拒否しています。村の生活は遠い祖先からの伝統と習

慣を受け継いでおり、森には極楽鳥・ホーンビル鳥・豚・ムルク鳥・ワラビー・様々な食べ物や家を建てるのに使う木・カヌーの木・薬草など生活に密接に関係する生命が育まれています。

村の収入源は漁業と、もう一つはタバコをクラフトショップに売る事です。タバコは畑で栽培して作ることでできる木なのですが、外皮をとって中身をたたくて伸ばしていくと、まるでなめしたようにきれいで強い一枚の樹皮紙ができあがります。これに今度は森から採ってきた2種類の植物を混ぜ合わせる事でできる赤い色と、炭の黒い色でペイントします。何を描くかというと、とても不思議な幾何学模様なのです。

この意味は何ですかと尋ねると、村の外で描く模様の意味はないが、村で描かれる模様には、先祖から受け継いでいる神話をもとにした一定の様式があると答えてくださいました。

彼はとても大きな人でしかもとても穏やかで落ち着いた初老の男性です。若い時は歯医者さんだったそうで、今は村の相談役です。彼にあなたは村の人の病氣を見てあげて、治してあげるようなメデイスマン的役割もするのですかと聞くと、「するよ。でもそれはその見てあげる人の事をよく知っているならあなたにもできる事だと思うよ。」と答えてくださいました。

目をくりくり回すウルスラさん

もう一人のPNGからのゲスト、ウルスラ・ラコバさんは法的に市民運動を支えているNGO「ICRAF」のスタッフで、熱帯林の伐採に関する論文もものしている若き女性です。彼女はPNGの首都ポ

トモレスビーに兄弟といっしょに住んでいるそうです。「ボーイフレンドは？」と尋ねると、ウインクしながら「いるわよ。」といっていました。彼女の出身はブーゲンビル島という所で、PNGからの独立運動がある所です。銅鉱山で有名な島で、PNG政府は独立させたくない為、反政府勢力との間で武力闘争をしているのです。同じ国内でありながら、ブーゲンビル島に行くにはビザの様なものが必要で、帰郷するにもいろいろな手続きが必要なのだそうです。そんな背景を持つ彼女ですからPNG政府に対する思いも複雑なようでした。

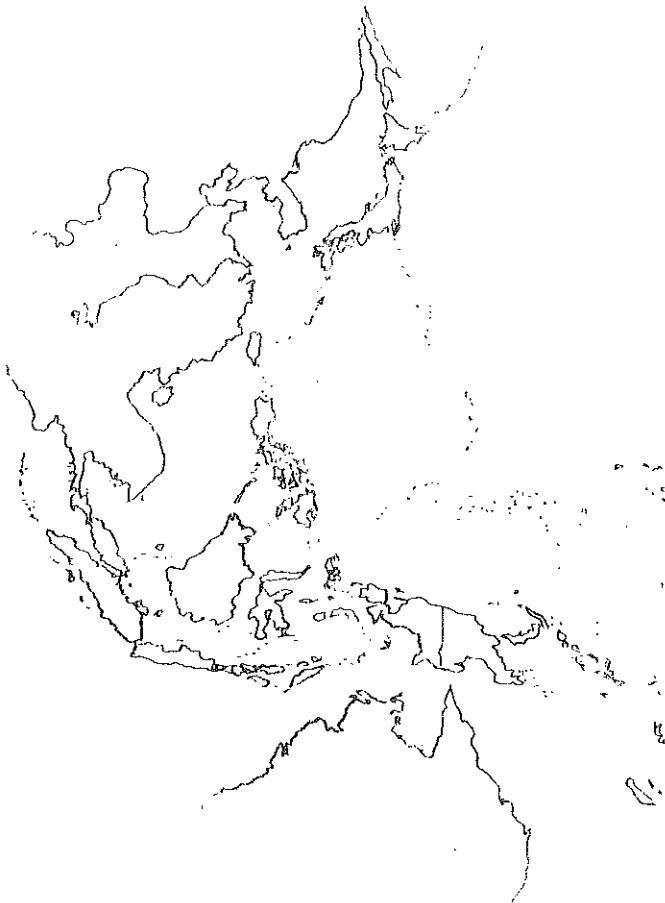
彼女の熱帯林伐採に対する思いは痛切です。「PNGの人々は土地を売り買いできる物とは考えてきませんでした。それはむしろ人々にとって先祖から受け継いできた自分達の生の原点、アイデンティティの源なのです。こうした土地を支えてきた慣習的土地所有制度も世界銀行やIMFによる構造調整プログラムによって制

度の見直しを迫られるという危機にさらされています。私のシンプルナリクエストは、PNGの木材の大消費者である日本の方々にこの状況を知り、PNGの破壊的伐採をやめる運動に参画してくださいという事です。」というメッセージを言葉は静かですが、いっしょに行った多くの場所です話しておられました。

朝早く京都を出て神戸にむかい、市役所・県庁で熱帯林使用削減の願いをし、神戸NGO協議会例会での報告の後、大阪でのウータンの特別報告会に出るといいうハードスケジュールにもかかわらず我慢強く着いて来てくださった二人でしたが、さすがに最後に大阪にむかう際にはウルスラさんが（ふざけてですが）目を回して、こちらはごめんなさいねと平謝りするという一幕がありました。フランクリンさんウルスラさん本当にご苦勞様でした、そしてありがとうございます。

（会社員・あちきたくま）

where is Papua New Guinea?



Papua New Guinea

パプアニューギニア
 人口・三七〇万人（一九九〇年）
 言語・英語、ピジン語、民族語
 宗教・カトリック、伝統宗教
 ・国連加盟は一九七五年。
 ・六百余りの島々からなる。
 ・一九九〇年、ブーゲンビル
 が独立を要求して政府と対立。

▼「日本が消したパプアニューギニアの森」より



最後の熱帯林“パプアニューギニアをたずねて

編後 報告・辻村 方孝

翌々日、アミオ村に移動する。分水嶺をはさんで島の南岸に位置するアミオ村は、現在雨期の真っ最中。世界有数の降水量を誇るこの地域の雨期のため、車で島を横断するルートは途中で立ち往生の危険性がある。南岸にある空港も閉鎖中。というわけで、少し費用はかさむがヘリコプターを利用することになった。

ブルマ村からほど近いキンベの町からヘリコプターに乗り込む。空中撮影をするために最短コースをとらず、海岸沿いにブルマ村までもどり、そこからSBLC（ステインベイ・ランバー社）の植林地・伐採地の上を飛びアミオ村へ向かう。

海岸のオイルパームプランテーションに続き丘陵地に植林地帯が現れる。整然とした同じ緑色のパッチがそここに散在するのでそれとわかる。山地にかかると伐採道路周囲は、択伐で荒れた二次林が多くなる。ところどころ皆伐されているのは、植林予定地なのだろう。伐採された丸太を道路脇の集材場所に集めるためにブルドーザーが動いているのが見えた。伐採地は今も南

に向かって伸びつつある。

やがて処女林の上に出た。手つかずの美しい熱帯雨林。植林地のように一色ではない色とりどりの豊かな緑。オウムの類だろうか、時々白い鳥が舞い上がる。非常に腕の良いパイロットで、森の上すれすれのところを飛んでくれた。目のすぐ下、あるいは横に熱帯雨林の樹冠が広がっている。

そして、この森から川が流れ出していく。その流れは清らかに澄んでいて、東南アジアの茶色く濁った流れを見慣れた目には、むしろ違和感をもって映る。地質の違いにもよるのだろうが、開発の手の入っていない豊かな生態系が残されている何よりの証拠だろう。森が雨を受け止め育んだ水が、川になり海に注ぎ込み魚を養い、時には伏流して海岸付近で泉として湧きだし、島の人々の暮らしを支えてきた。

1時間弱でアミオ村に到着。ここは、SBLCの南岸の拠点であり、木材積み出し港もある。北岸と南岸、それぞれ交替で乾期に伐採作業を行うのである。ここから海

岸沿いに伐採道路が伸びていて、その建設工事の際にブルディングと呼ばれる聖なる石を元の場所から落としてしまい問題になっている。ただし、SBLC側は工事の際に落ちたものではないと主張している。また、伐採道路が村の水汲み場となっている泉のひとつを横断する形で通ってしまい、泉の水が濁ってしまうという問題も起こっている。またアミオ村の近くにあるカイカイ島でも、対岸にある水場が伐採道路のために汚染されて、遠くまで水を汲みに行かなければならなくなっている。

またブルマ村でもそうだったが、アミオ村でも泉や川の水量が少なくなったと聞いた。これも伐採が進み、植林地が増えていくことが影響しているのではないかと思う。

アミオ村にまる2日滞在し、再びヘリコプターで北岸に戻り、ブルマ村で一泊。翌日ポートモレスビー経由で帰国した。

ブルマ村での最後の日、再びSBLCの



熱帯林連続講座PART3

住宅編①～外材より国産材住宅を！

ウータン学習会
Report

「住宅は造るときから考えよう！」
連続講座PART3住宅編の講師は
国産材住宅推進協会の北山康子さん。

こんな理由から作られたのが国産材
住宅推進協会だ。国産材住宅推進協会

は、宮崎などから大工込みの産直で住
宅を造っているの、かなり安くなる。

「わが国に千万 を超す人工林があ
ります。この人工林は二千年を過ぎる
と、大半が伐採期を迎えます。仮に伐
採期を五十年とすると、毎年二〇万ha伐
採し、植林すれば永久的に森林が得ら
れ、机上では自給は可能なんです。と
ころが、十四万人弱の林業従事者が毎
年減り、国内林業がピンチです」と。
国産材流通は高品質材中心になって

北山さんによると、国産材の主樹種
の杉中丸太が米材梅丸太と競合する
という。国産材住宅推進協会の杉正角1
㎡は53千円で、米材梅丸太との差は一四
八円。ちなみに四〇坪の家の全使用量
四〇㎡の杉材価格は約二一二円で、米
材より一八万円しか高いだけだそう
な。住宅は造るときから考えたいもの。

①国産材↓林業家↓原木市場↓製材工
場〔業者〕↓製品問屋↓製品市売市場

〔国産材在来工法は地震にも弱くない〕

↓材木店↓大工〔工務店〕となっている。

「国産材の一番の問題は、生産・加
工・流通体制の整備です。零細な森林

②外材丸太↓現地業者↓商社↓製材業
者↓製品問屋↓材木店となり、

所有者や流通関係の業者が零細で、協
業化・協同化は不可欠になっています。

③外材製品↓現地業者↓商社↓卸売業
者↓材木店となり、外材は商社から

私達のような産直住宅といえども、全
国七七団体で数%にすぎません。今後

大量に均一のもが入ってくる。外材
輸入で他国の森林を根こそぎしている。

協同購入の確立や林野、建設、環境庁

などを巻き込むリーダーシップが必要
と思います。

ところで、阪神大震災より在来工法
を建築する住宅が減り、ある調査では
震災前の56%から34%に減少し、ツ
バイ・フォーやプレハブ、その他の工
法はいづれも倍増しています。在来工
法が地震に弱いのかというところ、『NO』
です。確かに木造住宅がたくさん倒壊
しましたが、ほとんどが現行の耐震基
準を備えていないものだったり、重い
屋根瓦、筋違いがなく、開口部が広が
りすぎていたり、シロアリの被害によ
る住宅でした。昭和六二年以降に建て
られた在来工法の木造住宅では、ほと
んど被害がなかったと報告されています。

木は使い方によって非常に耐久性に
優れています。例えば千数百年の風雪
に耐えてきた法隆寺などが見本です。

いま鉄筋コンクリート造りの老化が
大きな問題になってます。木材が腐る
のと同様に鉄は錆び、コンクリートも
風化します。要はどれだけ家を大切に
するか、補修するかです。生命を大切
にしていけば、住宅や森は永くあるも
のです。」

〔文責・西岡〕

永田さんの家具ばなし

「連続学習会・家具編」

ウータン学習会
Report

井下祥子

『ウータン』の表紙絵やカットでおなじみの、永田健一さん登場。

このヒト、実は「熱帯材を使わない家具づくり」にこだわる、家具職人が本業だ。

家具の訓練校に通っているとき、「サラワクの先住民が森を守ろうと道路封鎖している」という署名用紙がまわってきた。それがウータンに関わるきっかけだった。

スライドでつぎつぎに紹介されるイス、ベンチ、学習机、テーブル、チェスト、食器だな……。つくった人の顔がみえる、「私だけの」家具。アフターケアもある。

大工場で作る家具は、パートの女性でもできるように、力の要らない釘打ちやホッチキスどめをする。安価な「だぼ（金具）接合」の家具は壊れやすい。

木と金属という異なる素材を使うと、後々はずれてくる。たとえばイスの脚がとれたら、釘を使わず、穴をあけて木で継ぐとよいそうだ。

手作り家具は、接合面の細工に手間がかかるので、高くなるが、「買う人と相談しながら注文通りにつくれるし、使うほど味わいがでる。親子代々つかえます」

仕上げはラッカーやウレタン塗装でなく、オイルだけ。使ううちに色が美しくなってくる。

日当・材料費・工期を計算すれば量産家具の3〜6倍の価格になる。それでも「なかなか喰っていきません」（笑）。「合板の家具はアカンと思いますけど、大事に使ったらええと思うんです」と永田さん。環境コストを考えれば、合板の家具の価格は何十倍にもなるはずだ。

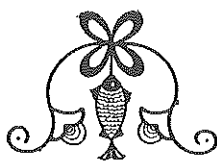
おまけに、何倍も長持ちする手作り家具は、充分「お得」なはずなのだから……。

材木屋さんのおはなし

永田さんがいつも家具用の材を頼んでいる乾さん。国産の広葉樹から南洋材まで扱う。

見本を持参で材木の種類や用途、原産地をレクチャーしていただく。（熱帯材の種類・用途については、連載中の猪俣さんの「熱帯材を考える」の表に詳しく書かれています）

近頃は、新しい種類の木がどんどんはいってくる。たとえば、フィリピンでは、低地のラワンを伐りつくり、高地のアガチスに変わってきた。最近、南洋材はへり、イタリアで製材したアフリカ材がはいってくる。アフリカはまだ太い木がある、とのことだった。



*使用年数は、いずれも10～19年が最も多く、20～29年がそれに続く。さすがにタンスだけは50年以上（最長80年）のものが4点あるが多いのは、やはり10～19年（8点）である。

使用年数が「不明」または未記入のものもあり、判明すれば、もう少し長くなる可能性がある。

「手放していない」が159人（44%）あるが、地震による破損がなければ、もうすこし増えたかもしれない。

4. 手放した理由

「こわれた」60 「引っ越し」44 「狭くなった」16

「（子供が育つなど）不要になった」13

「新品が欲しかった」13（いずれも会員以外の人）

「よごれた」11 「よりよいものを入手した」6 「震災」3

5. 手放した家具の処分法

「粗大ゴミ」91（50%） 「人にあげた」51（28%）

「業者ひきとり」24（13%）

「こわして再利用」9（組木・木工品・植木鉢の棚・押し入れ収納棚）

「売った」4 「家とともに解体」4

7. 父母、祖父母の代からの家具の有無

「ある」189人 「ない」188人 「無回答」17人

「ある」のうち圧倒的に多いのが「たんす」で75件

「桐たんす」「祖母の桐たんす」が多く、「曾祖母のたんす」が2件あった。（「たんす」とのみ記入されたものも多いので実数不明）

8. 「天然木」と表示された家具にも熱帯材合板が多量に使用されており、それが表示されていないことを

「知っている」140 「しらなかった」206 無回答11

（以下、次号に）



家具アンケート結果報告

約一年間にわたり、多くの方の協力を得て、『木製家具に関するアンケート』をおこないました。

総計361（うち会員70人 19%）の回答があり、「環境と家具について」といった自由記入の項目にも、予想外に多くの方が意見をくださいました。これは、身近なところから熱帯材の浪費をなくそうという、熱意のあらわれだと思います。皆さんの「想い」を大切にこの結果を生かして今後の活動を進めていきます。今後もご協力をよろしくお願いします。

1. この5年間にどんな家具を入手されましたか？

「全く入手せず」が87人で24%

のこり76%の人が入手した木製家具は総計840点。

多いものをあげると、いす264（点）、本棚113、たんす112、食器だな98 学習机81 ダイニングテーブル72となっている。

2. 入手法は、

a. 「新品を買う」656 + 「新品をもらう」25 計681（81%）

b. 「中古品を買う」21 + 「もらう」73 + 「拾う」33 計127（15%）

（bのうち約38%がウータン会員、特に「拾う」は会員が13点と高い割合をしめている）

c. 「自分で作る」21（3%）

* 新品を買った理由では

「必要に応じて追加」（子供の入学・出産・本の増加など）80人（29%）

「引っ越し」47 「古くなった」41 「破損」（地震含む）37

「新築」31 「結婚」23 「改築」10 「汚れた」3 （計272）

「結婚」が少ないのは、回答者が20代（17%）よりも

30代（20%）40代（33%）の多い構成になっているため？

3. この5年間にどんな家具を手放されましたか？

多いものから 机35点 たんす27 テーブル26 椅子23

・食器棚23 ベッド22 本棚14が上位に来る。



「熱帯林を考える」

12 開発輸入の構造と問題点

徳島県熱帯林問題研究会・猪俣栄一

海はじめに

この連載もいよいよ終りに近づいてきました。今までは熱帯林とはどんなものかということ、熱帯林業といわれるものが熱帯林にどんな影響を与えてきたのかという、環境面に力点を置いて考えてきました。

しかし、戦後の南洋材開発輸入の軌跡を振り返る時、森林破壊という環境面の他に、忘れてはならないもうひとつの重大な側面があります。それは、先進国と資源国（途上国）との間で行われた一次産品貿易の構造の中にある「南北問題」「経済的侵略」というべき性質の問題です。

天然資源の中で、木材資源は繰り返し収穫のできる唯一の資源だと言われていますが、今のところフタバガキ科

樹林の大規模造林は不可能に近く、多様な木材資源としての熱帯雨林の再生も極めて難しいと言われています。そのように回復困難な熱帯林を先進国に売り渡して、産地の途上国は替わりに何を手に入れたのでしょうか。

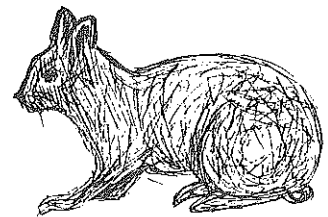
今回と次回は、一次産品貿易の問題点を、南洋材に焦点をあてて考えてみたいと思います。



(一) 一次産品の開発貿易の構造

第二次大戦後、西洋の旧植民地であった地域に澎湃としてナショナルリズムのうねりが高まり、アジア、アフリカをはじめ、世界中の植民地や保護領が次々と独立してゆきました。

ところがこれら新興独立国の多くは、旧宗主国によって長い間「生かさず、



アマリコウサギ

殺さず」式の統治を続けられていたもので、独立はしたものの産業基盤がまるで未整備の、いわば裸同然の状態で国際社会の中へ飛び出してしまったのです。このような新米独立国にとって、国家財源や外貨を手取り早く手に入るには、天然資源を輸出することしか方法がありませんでした。

ですが、何等の産業資本ストックもない途上国にとっては、天然資源開発の資金さえまなりません。切羽詰まって、取引相手国の企業などの資金で天然資源を開発、生産してもらって輸出したのです。企業進出とか外資導入とかいうと聞こえはよいが、いわば天然資源の切り売りでした。これでは資源国主導の価格形成など、できる話ではありません。

また天然資源や農産物などは、一次産品としてよりも、できるだけ加工し付加価値を高めて輸出した方が、外貨も余計に稼げるし、価格変動の危険も少なくて済みます。加工による雇用機会も増え、よいことづくめです。しかしこの途上国にも、そんな工業化の資金はありませんでした。



(二) 一次産品輸出安定化の流れ

そこで、途上国は、旧宗主国を中心とした先進輸入国を相手に、価格や取引量の安定化対策、さらには新規開発や工業化に向けての資金協力といった援助を取り付ける必要に迫られました。

まず一九五七年、旧フランス領のアフリカ十四カ国、旧ベルギー領の三カ国、それにソマリアの計十八カ国が、当時結成されたばかりだったE.E.Cとの間に、特惠関税や開発資金援助に関する連合協定を結びました。

この連合協定（アジア地域は含まれていない）は、その後第一次、第二次のヤウンデ協定やアルシーヤ協定へと引き継がれ、一九七五年にはアフリカ、

カリブ、太平洋地域の四十六カ国と拡大E.E.Cとの間で結ばれたロメ協定へと発展してゆきました。内容も、これらA.C.P諸国の一次産品十二品目の輸出所得の安定化保護とか、国際価格下落時の救済措置など、新しい内容が次々に盛り込まれてゆきました。

これらとは別に、一次産品の輸出国と輸入国との間に、一九五四年の砂糖を皮切りに、価格安定と需給調整のための国際商品協定が次々と結ばれました。さらに、資源ナショナリズムが台頭するにつれ、輸入国に対して価格維持主導権を握ることを目的に、同種の資源産出国が同盟を結ぶ資源カルテルと呼ばれるものも生まれました。一九六〇年のO.P.E.C（これは消費国ではなく、メジャーと呼ばれる国際石油資本に対するもの）に始まり、銅、錫、タングステン、ボーキサイト、水銀、鉄鉱石、天然ゴム、バナナなどです。

(三) 取り残された南洋材



このように西洋とつながりの深い資源国に関しては、産出国の主導権が国

際政治経済社会の中で急速に高まっていったのに、不思議なことに、南洋材だけがこの流れから取り残されてしまいました。東南アジア産の熱帯材が舞台に出たのはずっと遅れて昭和五十年代（一九七〇年代半ば）に入ってからのことでした。

前述の連合協定や資源カルテルとは別に、南北問題を検討するための国連総会の常設機関、「国際貿易開発会議」（アネクタード）が一九六四年に設置されました。途上国の開発のための資金援助や特惠などの保護措置、一次産品安定化基金の開設などを総合的に検討する機関だったので、先進国間でもなかなか足並が揃わず、熱帯材については、一九七六年、マニラで開催された七十七カ国の途上国閣僚会議で採択された「一次産品総合計画」の対象十八品目の一つに、「熱帯木材」としてやっとリストアップされたという状況でした。

これと相前後して、東南アジア五カ国の木材産出国により「東南アジア木材生産者機構」（セアルパ）が結成さ

れ、木材資源の適性な取り引きを目指そうとしました。

しかしこの組織は民間団体でしたので、日本の通産省、林野庁はもとより木材輸入協会、日本南洋材協議会もロクに相手にしようとはしませんでした。第一、産地国政府自体がこの組織と協議することもなく、木材輸出政策や伐採許容量を次々と変えてゆきました。

一九八〇年代に入り、むしろ熱帯木材資源の枯渇の方が重要な問題となりはじめました。そしてその対応として、一九八三年に熱帯材の生産国一五カ国と消費国二十カ国とが集まって国際熱帯木材協定を採択し、翌年協定の実施機関として国際木材貿易機構（ITTO）が結成され、事務局が横浜に設置されました。

しかし、一九八〇年代後半に、資源問題としてよりもむしろ地球規模の環境問題として、熱帯林問題がより多くの人々の関心を引くようになり、一足飛びに、熱帯林保護論の立場から熱帯木材が見直されるようになったのです。この視点に関する限り、ITTOはほ

とんど無力な存在と言えます。

(四) なせ南洋材は取り残されたのか
このように、鉱物資源などは早くから価格協定や安定化対策が講じられていたし、木材にしてもアフリカ材はロメ協定の十二品目に含まれていたのに、なぜ南洋材だけが「収奪」と言われる程取り残されたのでしょうか。

ひとつは開発、生産基盤の問題です。鉱物資源の場合、戦前から西洋諸国の企業がアフリカその他の植民地で採掘していました。独立した時、その戦前からの生産基盤が整っていて、独立後に採掘業者が新政府に改めて権利金を払って採掘権を引き継いだり、あるいは石油については新興国が施設全部を接收したり買い取ったりと国有化したケースまでありました。

ですから、価格形成に関する産地国の発言力を比較的強めやすい条件が整っていたと言えます。

それに較べ南洋材の場合は、本格的な需要そのものが戦後の合板産業の拡大によって初めて引き起こされたと言え

る状況にありました。そのうえ開発と言っても、未踏のジャングルの中に道を付けることから始めなければならず、途上国側の資金力ではとても無理で、勢い輸入業者の資金と技術力に頼らざるを得ませんでした。

開発の契約も、表面的には現地業者がマジヨリテイ（日本側がマイノリティ）の合弁方式（それにPS方式を組み合わせたものがほとんど）になっていても、実態は林区権料から始まって伐採、運搬のための重機類、タグボート、トレーラー、人夫賃などのランニングコスト、果ては税金も含め、一から十まで開発輸入業者にオンブした形でした。

例えるならば、競争相手に財布を預けて商売しているようなもので、これでは適正な価格形成などできる訳がありません。事実、合弁の現地側ベンチャーは単なる名義だけという例が幾つもありました。

二番めには、消費国の需要の程度と、消費国及び生産国の偏在性の問題です。石油や鉱物資源のように、先進消費国

の資源に対する依存度（必要性の程度）が高く、かつ産地国が世界中に分散しており、消費国の数も多いという場合には、市場原理が働いてある程度適当な国際価格というものが形成されます。ですが、南洋材の場合は産地も消費国も極端に限定されていきました。

かつてフィリピン、マラヤ、ネシア、サバ、サラワク、と南洋材産地が移行していった中で、丸太輸出のシェアの七割から八割が日本向けであったという異常な状態がありました。そのような状況の中で、輸出者と輸入者、売り手と買い手の力関係もあり、当然いゝるような歪みが生まれてきた訳です。

その上、木材というものは典型的な市況商品ですから、なおのことその傾向が強まっていったと言えます。このような状況の中で、一部の例外を除き、価格設定や樹種選別、グレード付けなども、日本商社の言うがままに操られていたのです。



（五）南洋材の目覚め

セアルバが結成されたのは、まさに

このような外国資本への隷属からの脱却を目指してのことでした。しかし、二十年にわたってあまりにも外国資本に頼りすぎた禍根は、一朝にして改まりませんでした。

結成当初、日本をはじめとする輸入国への要望として揚げられたのは、

- 一、価格安定
- 二、為替レートの変動への対応
- 三、取引量の安定と保証
- 四、偏った樹種利用から、広く未利用樹種の利用への転換

という程度でした。

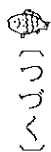
このうちの前三項目はロメ協定にもうたわれていました。輸入国側が変動への対応策として共通基金を設定し、輸出価格の下落や取引量の落ち込みの発生、為替レートの大幅な変動で輸出国側が影響を受けた場合などには、その共通基金で輸出国側の損失を補填するということです。

これは日本側に完全に無視されましたが、四項目の未利用樹種の利用法開発については、昭和五十年代後半（一九八〇年代頃）から徐々に動きだし

ています。というのは、単にセアルバだけの要望ではなく、政府ベースでも事ある毎に要望が出ていたからです。何よりも日本自身、ラワン系資源の枯渇に伴い贅沢が言えなくなり、新産地を求めてウオーレス線の東へと手を伸ばして行ったら、いろいろな樹種を使わざるを得なくなっていたのです。

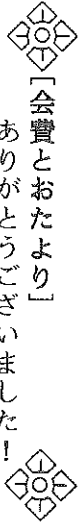
そして、パプア・ニューギニア開発拡大に伴って一気に吹き出してきたのが、「価格移転」（※注）と呼ばれる不正取引形態でした。実はこの問題は、フィリピンやネシア開発時代からすでにあったことですし、またこの問題だけでなく、南洋材開発輸入には、輸出側も含めてありとあらゆる不正（というより不正）が行われてきました。その典型的な例がマルコス時代のフィリピンでした。

次回は、これらの問題を振り返ってみます。



※注・この経済用語は、必ずしも適切な使われ方ではない。

な使われ方ではない。



「会費とおたより」
 ありがとうございます！

築二十年の我が家は木造で（中略）あちこち傷んでいてもあの屋根の下の大きなハリや、ヒノキの柱たちがゴミになって捨てられてしまうことを思うとともにとても胸が傷んで建てかえる気になれない。雨もりを直していけるところまで一緒にいこうと思う。同じ時に同じ設計で建てられた隣家がバブルの時に建てかえられたが、その時一軒の家の廃材の膨大な量にネパールの人たちの顔が浮かんだ。 田中愛子

いつもながらの素晴らしい表紙絵。そしてたゆまぬ活力。感心しています。名古屋（というよりは東海地方）では愛知万博2005年招致計画、瑞浪市の高レベル廃棄物処分施設（？）計画御嵩町の東洋一産廃処分場計画、藤前千潟ゴミ埋立計画と難題山積。今年も大忙しの都市になりそうです。お互いに頑張りましょう。 大沼淳一

「家の中の熱帯林」（家具についての冊子）の代金お送りします。（中略）「こんなの、知りたかった」「丁度よかった、家具を買ったときだったので」などの反応がありました。建築材の化学物質漬けの害はようやく本にもなっています。では、どんな建材・家具

をどこで、どのように選び、使えるかがまだ消費者にはわかりません。今後の課題と思っています。

日本消費者連盟 水原博子
 ＊ほかにも沢山のメツセージをいただきました。ありがとうございます。

「会費・カンパを
 いただいた方（敬称略）」二百名まで

青木茂雄 阿蘇紀夫 荒川純太郎
 伊東万千子 稲田隆弘 猪俣栄一
 上田真弓 馬谷憲親 梅尾文字
 Ms 建築設計事務所 大島歩 大田
 伊久雄 大西裕子 大沼淳一 大野
 浩史 大東弘 小倉正 大平浩子
 越智清光 海沼由起夫 春日直樹
 春日美恵子 北坂英一 北村千枝子
 神前進一 香本明世 五味義明 斉藤
 誠 坂口友良 進藤みゆき 田中愛子
 田中亜子 田中順子 田村美智子
 千代延明憲 槌田たかし 恒成和子
 寺川庄蔵 永田展雄 中村尚司
 西村和則 橋本征二 長谷部あゆ
 畑健次郎 平野誠 福島在行 本田
 次男 本領宏子 待場智雄 松尾光雄
 水田哲生 宮澤朔子 宮野由紀子
 向井千晃 麦島きみこ 明周正和
 望田敬子 森石香織 山川信恵 山口
 武雄 山崎大 山田園子 山田睦美
 山中浩一 山本達士 遊上義一

由良行基周 吉田和子 吉本弘子
 米川誠一 和田善行

皆さん、ありがとうございます。
 一月の総会で、財政状況の悪さが論議されました。事務所家賃の値上がり、郵送費・会報作成など基本的な費用の増加。海外ゲストの宿泊などの支出（会員の家に泊まってもらうこともありますが）。その割に会費・物品販売などの収入は横ばい状態です。（そのため、会費の払込のない方への督促や送付中止などは、以前より厳しくおこなわせていただいております）
 会費納入がまだの方、よろしくお願
 いたします。

まわりの方へのウー・タンの紹介や、出前講演のご紹介などもしていただけるとうれしいのですが。

＊裏返し封筒をいただけませんか？
 会報の発送用にはできるだけ再利用封筒を使いたいと思います、作業の合間に作っています。数がたりません。（一度に五百部発送します）少し大きめの、「ウー・タン」が三つ折りである封筒が最適です。厚かましいのですが、たまったら事務所にお送りくださるか、お近くのスタッフにお渡しください。

「封筒をいただいた方」
 佐野徳子 小山孝博



木林を 見上げて



手を伸ばしても届かない、高々とした森に出会った。

それは初めて川のカヤックで流れを下った時のこと。一切言うことを聞かない糧。流れの早さ。しぶきの冷たさを感じる余裕などまるで無い。あっという間に流れに飲まれて、沈(チン)・沈没のこと)。

無力さ、そして奇妙な開放感。

水に浮かぶ快さが恐怖心に勝り、再び舟を流れに入れる。そろりそろりと少しづつ、糧で方向が取れてくる。

ペタンと座って臍の辺りまで水に浸るのが、カヤックの構造。低い視点で、流れの中から岸辺の森を見上げる。黒い森は川を挟み、高く聳え立つ。自分と舟は「葉っぱ」と化して、木々の根っこより下を流れてゆく。この構図、仲々面白い。そう思った瞬間、また、沈。

「葉っぱ」から「魚」へと上達し、流れを上手く掴まえた時、見上げる森はまだ遠いだろうか。

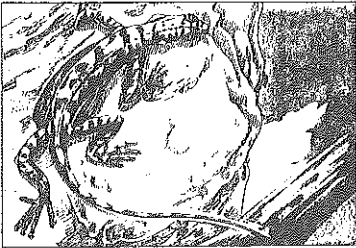
(風)

よんでみませんか?
あんな本、こんな本

『熱帯探検図鑑』 偕成社

「熱帯の自然を自分の目で確かめ、いきいきとした生物の絵を描こう」松岡達英のリアルな生物画の世界。アメリカのコミックスを思わせるまんが形式の「よみもの図鑑」だ。

オオトカゲの尻尾を踏みかけたり、巨大カブトムシを捕まえようとしたらボア(大型の蛇)が落ちてきたり、色鮮やかな熱帯の蝶や奇妙な虫たち。青空を飛翔するトビトカゲの姿に、子ども達のときめきもどってくる。マレーシア、メキシコ、アマゾン、パプア・ニューギニア、アフリカの全5巻で各三千円。高い!という方は図書館で。(図書館より)



投稿を募集しています。環境や自然に関するお薦めの本や、国内・国外の森の旅行記など。四百字前後でどうぞ。ただし必ず載るとは限りませんので、ご了承の上、お送りください。

☆☆ウータン・グッズのご案内☆☆

●先住民族絵はがき(絵柄5枚セット)

93年作成。再生紙使用。イラストはもちろん「ウータン」表紙から。まだ在庫あります。カラー、三百円也。

●書籍「日本が消した

パプア・ニューギニアの森」

明石書店。二千六十円也。

もっと、パプア・ニューギニアのこと、知ってみませんか?入門編にして深みのある一冊です。

●書籍「9つの森の教え」 築地書館

千三十円とリーズナブルだけれども充実の一冊。中心はマレーシア、サラワクの森の先住民族の暮らし。

・ウータン・オリジナルTシャツ!は作成に取りかかっています。近々お目見えの予定、請うご期待!

●また、オリジナルグッズを作れるお店や会社、個人などの情報を、お寄せください(例えば、オリジナルの煎餅を焼いてくれる〇〇堂さん、など)。グッズのアイデアも大募集!です。

森の真髄

photo 荒川 共生

4



メランティ(フタバガキ)の種

伐採されコンクリートパネルなどの合板の主な原材料となるメランティは、大きなものでは高さが50~60メートルにもなる。熱帯雨林という過酷な環境で生き残るために植物はさまざまな工夫をしている。メランティの場合、種を遠くに飛ばすため、種に羽根をつけ、回転させることにより滞空時間を延ばし、しかもできる限り高いところから、落とすことでさらに遠くに飛ばそうとする。マレーシア・サラワクの先住民は、この種子が脂肪をたくさん含み食べられることを知っていた。現在はこの植物脂肪が、体温に近い温度で溶ける性質を利用して、口紅やチョコレートなどの原材料として使われている。

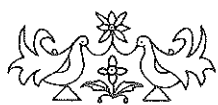
☆☆☆広報よりの☆☆☆

「ウータン」紹介パンフの巻く

今回ようやく同封できました、「ウータン」の紹介パンフレット。このパンフレットを配付して下さる方、置いていただける所を探しています。

たとえば、お近くの公民館や生涯学習センター、アウトドアショップ、ボランティア団体のオフィス、イベント会場など。

ご希望の部数を明記して、「ウータン」事務所まで『封書で』お申し込みください。(☎は第二第四火曜日の晩のみ) 送料程度分の切手「カンパ」があると非常に助かります。



INFORMATION

— 次のウータン主催の学習会は、今年秋からです。今号で案内する催しのお問い合わせや資料請求は、各団体へどうぞ。

☆森林連続講座「森を語る人になるう」☆
時・5月10日〜12日(終了)、7月26日〜28日、10月25日〜27日、97年2月28日〜3月1日
(定員割れの場合は、部分参加も可能)

兵庫県東上郡市島町での森林ボランティア活動。一年を通じた林業体験と森林観察会。

問い合わせは、神戸学生青年センターへ。

☎657 神戸市灘区山田町3ノ1ノ1

☎078・851・2760(担当・山本さん)

☆林業体験・枝打Party「下草刈り」☆
時・6月29日〜30日(申し込み6月20日)

毎年恒例「枝打」合宿の事前作業「下草刈り」を、兵庫県丹南町大山で行います。

問い合わせは、主催のPHD協会へ。

☎650 神戸市中央区元町通5ノ4ノ3

元町アーバンライフ202

☎078・351・4892(担当・渡辺さん)

☆森林シンポジウム「木を伐り、使おう」☆

時・6月15日(土曜日)午後1時から

場・日本生命中之島研修所(JR福島駅下車徒歩)

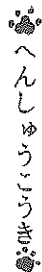
永田健一さん他4名のシンポジウムです。

往復はがきで左記へお申し込みください。

☎530ノ11朝日新聞社内

森林文化協会「シンポ」係(6月5日迄)

☎06・201・8410か8411

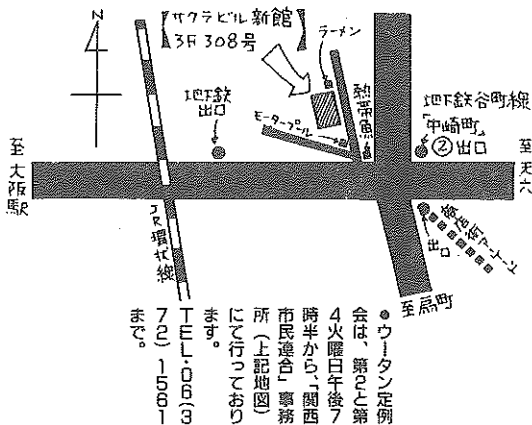


へんしゅうこうき
本当にお詫びするしかない、今号の発行の遅れ。とにかく「ウータン」は、生きてます!ので、皆さんの力、知恵を拝借したいと思います。

アンケートはがきの返送やリーフレットの配布、お金の心配などお願い事ばかりですが、花と同じく、手間をかけ水や栄養をやる、より充実した実がなることは間違いなし。あなたの期待に応えられる「ウータン」を、育ててください。

(♪ピンチヒッターの山猫屋でした♪)

【ウータン事務局】



●ウータン定例会は、第2と第4火曜日午後7時半から、関西市民センター(事務所)にて行っております。
TEL:06(3)721-1561